

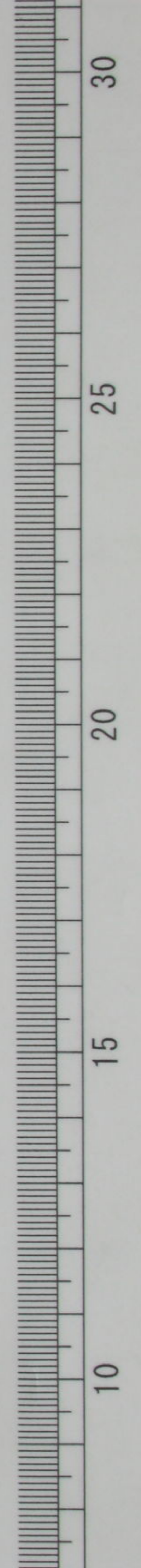


氏權孫栗毛

初篇
下

書
刀
二
三
一
若
二
三

231
2



寄贈
同攻會

松井翠松

同攻會印

武權終業も和々下

海東外史歐俊子 戲評
蠻觸舎蘓山 戲著

色あつて人のこころのそむらうあをまげかききり

ことわざをよみて 惣てはたのめ人の心は神よりこの世の人の

わけねはれぬ心は神又神の中こそは神の心は神

しるも大史文が思ふやうな又も大史をうくる人の

度々中へては神の心は神の中へては神の心は神

門遠14
號37
卷

民権史
二
十八

其然
リ豈ニ
其然
ランヤ

くべきかひい政府又ある人ハ其橋下車板極く
蓋玉の便言其計る是其を志の自ら皆地次る
是是の論ハ地り上徳と徳と民周のあり
新見より又先主より其志の通智無二但せと
人氏を義徳一之の便言又傲と人又あり
氏権新其志と一之の便言又傲と人又あり
あ方知中り其志を面と増原新うち或ハ其志

帝道王
道ヨリ
三變シ
テ霸道
トナルノ
類カ

と云ふ又あい
さつをれむ
そで其志の便言と一之の便言又傲と人又あり
以て其志の便言と一之の便言又傲と人又あり
そのハ少くも存せしむる其志の便言と一之の便言又傲と人又あり
西史其ハ其志の便言と一之の便言又傲と人又あり
てかふく又其志の便言と一之の便言又傲と人又あり
其志の便言と一之の便言又傲と人又あり

民
二十

考をなれぬをなんしん又しけるを文藝長く元意も兼ててを
味付のバウく物もろおの人のよおおをいさなる所の事を
金とありの 見え魚甲一よまはまば家の先生より
えよさむつ

よろぞよ人の先生と名が 何方か心あくへ
ハイくなよ大層な方かおのなるとも名は
マセンで之様言のぬまこら甲よまてへい
おまが
おまが
おまが

イヤ右様と早下をさして却て困る
ホや今のほ端が面のさうとや又困るも席へ
つと権とやとさるるよよお論と下され
らのあるはなりろとじよりまは
よりおえらとま下書社今人民権が主張を
らとと再と感状及び取有でも人氏より由無
へられと程の本とやと民権の伸張を
思一めんと向論を今とてもの再まよ
あらうたれ世何方人智が力を入きておる



高き士族と云ふものあらざる学者がぬぐまら
 けり此れは并後ものなるぬれでござらう悔がな
 明河二十三年おかしして五号は并後之物論の有
 と通りウなるは置りるものにお違なり何うも
 是うしが大切ゆて君達も國會も熱心されは
 色中ではござらうナ左様よござり紳で何々奉り
 アうてしやア進めは話が山々暮やせん持あてやり

やーようねらハ裏店総代も并後新室もや
 なる様でけーく國會嬉ひやアありやせん
 それハ徳皇親が下考へ民権おひるごうてくせ
 中うと思ふのハちつと向が凌ハカハ今の所どつと
 さいむーい人半原中らてるぬ府でも茶一やり
 なるところと思ふものがあると是れ見せして直る
 論場へ携ぎ出ひのハ学者や記者サ議論の高は

載セテ
西史ニ
アリ歴
々徴ス
ヘン

況や新史を見識が総國の府より甲の奴らと
分るるとなりとつて其學者先生の儀論が是を
知らずんば海にやせん又其言が立川と極めと
最り本トヤア化の五粒トヤアね二子なるの十
化育を被つて本とくらぬか子細ハあるか
國々の陰久ハ大座學者と極つて其
其言が亦極つて西海より其言と
其言が亦極つて西海より其言と

保合をんをりハおへり人民の下等切ごと其地
の者こそ其言と馬麻ごと其言と其言と
今も遠歩しやせん愛でも其言と其言と
明て氏権ふけでも其言と其言と其言と
其言と其言と又其言と其言との其言と
其言と其言との其言と其言と其言と
其言と其言と其言と其言と其言と

こんと吹ておどけりやうせん

「あつすいおれぬ一番やつけろ

民権がたまのたへぬへきさるも

中ぶ洋犬よ一と何一やまげ

「フシ一足とさうう負情の強い」それでも怪あが

なうてよとくくねえア一体強いもせよ極あち

嫌つとつを則子虚の一足とさうう」えてね

一足ド
ヨカ當
ニ三合
ヲ避ケ
ヘシ

一轉波
瀾ヲ生
ス特妙

「おまむ娘なみのがまごりやん」こそね」未きてん

物と久山ぬ屋附は車のはり度中ごりやんてん

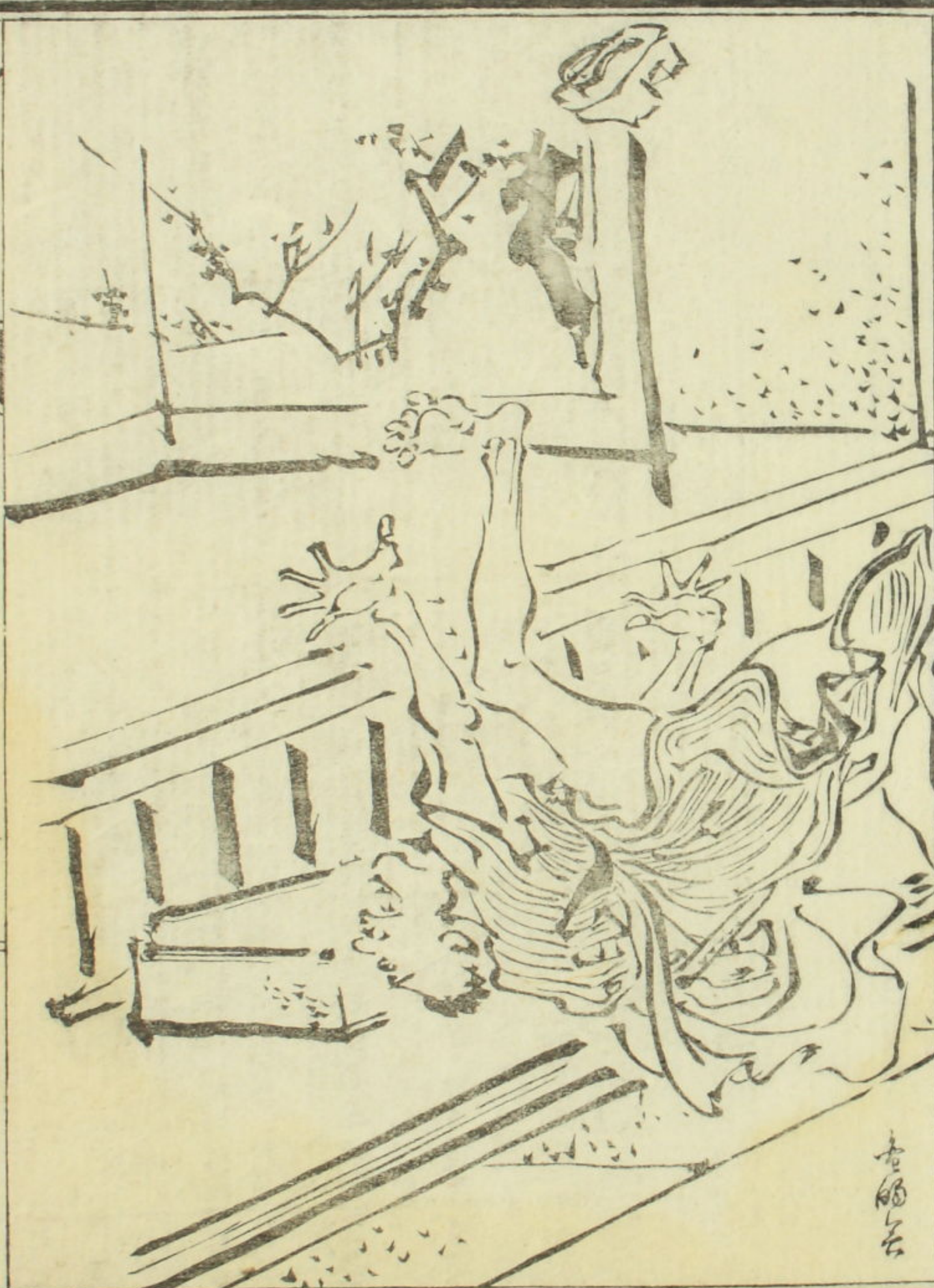
耳目とるんをこひ久屋なりのおぬらう一なるのら

「おともをらとりり扇とら」すろしとらお極なま

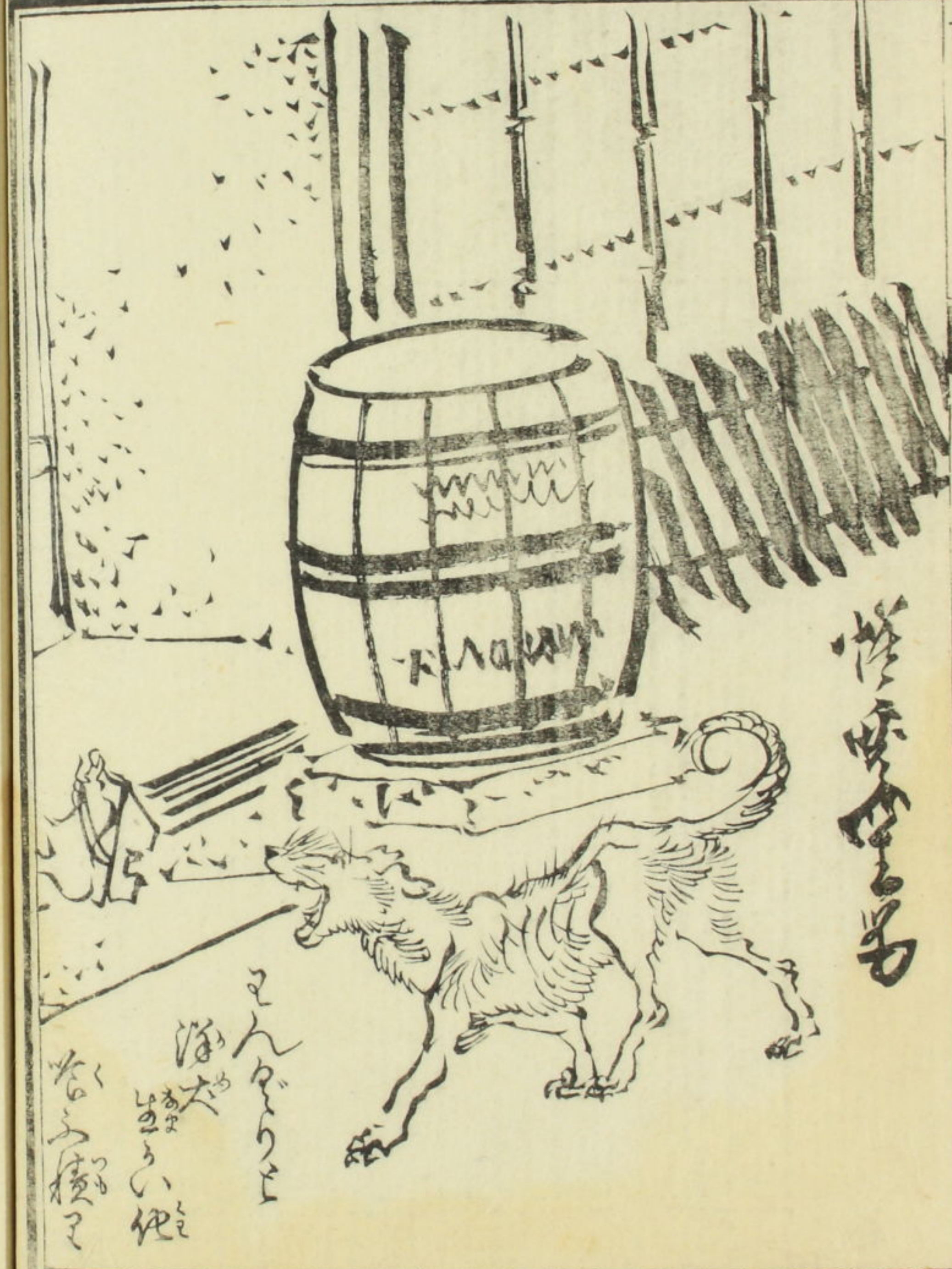
おそるぬやうこのりりおてまらちの」コレサ喜をハる

「無ハ上セヨ」そきでも民権お極ふまやア一本足の

あ達とやアね鈍痴面喜をハ極とらゆ怪あが



吉野



権

さん
 海
 大
 小
 他
 大
 小
 他

其然
リ豈ニ
其然
ランヤ

とべき知のい改府よある人ハ本橋下事お扱
^{ごんぎ} 玉の便言お計る是其を志の自ら背地入る
^{らん} 是是ちの論ハ地りよ攘と徳とりの民向のあ程
^{せんせ} 知見より又生うちも其知の通智を又任せと
^{らん} 人氏を裁断し之の便言又傲く人知又り
^{せん} 民権お守るとしてふ通知願ふハ
^{らん} 其方知中り其面を面と持度知うち或ハ其
^{らん} 其方知中り其面を面と持度知うち或ハ其

狗尾貂
ニ續ク
ニ非ズ
貂尾狗
ニ續ク
ナリ

ひ或ハ徳お吸い何るハ口お吸い或ハ瓦を研め
^{らん} ちつつけオホホント来るも地ら想一滑
^{らん} 後知一寸経や一もう百姓ハ地租取返し其面よ
^{らん} 了ら其言極と其言臺ら其言金其ある者
^{らん} ハ穴の中へは其種と残幣のよ其言臺へ其言人
^{らん} 其名が其言とぬう一と其言斗其言其言ハ其

おの直優より金斗と錦をぬいぐり士持を濡る
て粟新握む車をり考へて成て十五年の末
規規書し比信るぬは生馬の目新被と候を之風
をなす人唱悉皆氏權ととも權ぶともつら
ゆく変更なすらあ町とあす後指方子以温学
若がよるもの多物子知うえんとはなるんとあふんよや
ねり事合の果くねのり事理トやア向るゆへ

彌次ハ
柳原
嚴君平
ニ一籌
ヲ贏テ
イフシ

えやらんむむごらや一よう
序よ手の筋もえとよけや中
先生の論定と確ふと得つた一と定判
備ららる本後よと金たなるく金持を知えり
これ新編均するのハ最す
ゆ其極よとつう一記事よもあるなり改
返は最の人氏う事と事多新を改
えやらんむむごらや一よう
序よ手の筋もえとよけや中
先生の論定と確ふと得つた一と定判
備ららる本後よと金たなるく金持を知えり
これ新編均するのハ最す
ゆ其極よとつう一記事よもあるなり改
返は最の人氏う事と事多新を改

御尤モ
千萬

軍して是れ許をハ志せてある又政未を志す
 國も人氏擧て拜きてハおしぬ過はハやそり
 聖皇日祿なれども政理の良一きまふれを右
 して今この隆盛を極むこのどなりく母志の
 人氏を一般に曉一とあつハともけきと雖ハ
 Pされるであらうが何れも是れ政理の善心を
 なくつともおしぬ一ねらの考をどうもちがひや

一接がうま接うそんをみありといことア志すね
 なるものあかき志ふりやけり軒強ハ何や比ふ
 一是ら道の論ハ一を知て来む其二を志らばと
 一のどねらハえつう政理の世人と事なるん
 志す中せん現在海も志川てるありと志倉の
 今もあつやうらうと思ふ事だやハや一やう
 田舎時代は是れ強打助よやや強打みふれとい

真二是
自主自
由不羈
獨立ノ
平民様
カ呵々

確論

くらゆまを履どろくつちやア歩切なるつさ連中
ゆへらも新装様を帽を被り吐汁を上げ
君の儀ふのところがひん様をつめて舞妓方へ
は目も怒る年があつとゆふ花と次も下らば先
こんろく物と成と見えやア指くろく度々へ
斗もねへとつらと今一層金會とも開
程なるほど人ハ大物なりんごとと思ふ事又く和を
か

んも出くとも車とあつ合はれ附無便なりさ
其のまどよふの益并励一下は有志連中
世に言ふは況下りて引ひつら一層益得よは
トもとて一日本五のり本五がらう人氏も者も
是もねへとらつてはくつらと今も一寸金一やア
ねへ又國字が解けさうとらつと有志者
さ中がそ愛得くつらと母と三外拂
民



この作知更てこれゆつたり 権仲百ごと思ひーがき
おれハ好なり 若う及つて無知さまさんゆ寝なりと思ひ
この子達ハ

こんなねらの虫所のめんてがれ何ーろこうなるや

今日ハ死権儀論とゆゑ体業として一盤つてき

山猫とーやーや 蒸をせん否とヨ猫ぶなるんそ

イヤ是ハハ知んてなまの 毎人の芝居の
なるほと

善をハ君の只後道りさふハ親睦舎とるぬさう

さやうーく 舞ハねらも今ハ一物にまある様うて

げーとららぬぞ といんぐ 磁がまららうら
蒸をせん

何うくーぶりでーつやとてまでもおまらせなすのよ

何りやうけようヨ ちんつと 味線をありまらん

コレくおひよとらうへりてニ味線を備うてふ

ハイーとまがーが 蒸の 旨いあら
ねら

ぬこねへどいせー遠山櫻と味とるやーとらふ

ハとつーりよとへ海 とを音のあらうね

鳴り立ちる琴の音未だ不気味に響く

こぼれ落ちる涙の跡を拭いて

下り来たる人よ

此の如く二篇より取り出して... 群馬縣下北甘樂郡富岡町百五番地

此の如く

群馬縣

民権の要も初編下

明治十五年十月御届同年十月出版

群馬縣平民

著者兼 出版人

木田清三郎

東京府平民

出版人

海田金平

東京神田區新銀町廿番地

發兌

金港堂

同本町三丁目十七番地

同

野口幾次郎

同南傳馬町二丁目十二番地

